
昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

【Zコード】

Z9940Z

【作者名】

ちゃんじつ

【あらすじ】

主人公は、どこにでもいるような学生の振りをしている

その正体は魔界で、漆黒の無双と呼ばれた魔法剣士

ある日、いつも通り学校に登校するが、校門の近くで異変に気付く
ものすごい数のガードマンがいることに・・・

そして、その中心にあたりには、魔界から逃げ出させてくれた恩人の王妃とその護衛の女騎士団がいた

無視をして、教室に入ったがいいが、最初の授業開始早々王妃が教室に入ってきて、私の王国を助けてくれと言つ

主人公は、いくら恩人の頼みでも一度は剣を捨てた
そのことから、一度は断るがドラゴンが現れるとなるとまた、剣を

とり王妃を守る

そのことがきっかけでまだ、主人公は現役、いや、むしろ昔より強くなっていることを実感する

そして、王妃は助けだしてくれたら一緒に逃げてきた自分の娘をやると言い出す

主人公はもちろん断るが王妃は全然聞かず、自分の夫、王が病で倒れて新しい王になれと言われ

強引に主人公は戦うことになった

もうちょっとだけ、戦うことを決意して・・・

この、小説は一話ずつ視点を変えたりするのでご了承ください。
一応、前書きで部分で誰視点かを書いたりしますので

一話（前書き）

今回は、かみさやけんじ神彩剣吾視点です

一話

さて、どうなつていいんだ？これは・・・いつも通り学校に登校しようとしたら、高級そうな車が止まっているその外にはガードマンが大量にいる・・・どうことなんだ？

俺には一つだけ心当たりがあつたが、俺はそれを無視し裏側の門から入った

【教室】

「なあなあ、あの高級車なんだと思う？」友人が話しかけてきた

「さあな、誰かお偉いさんでも来ているんじやないか？」
「お偉いさんって来るわけないだろ？こんな学力とかいろいろ低い学校に」

「そうだよなあ」「一応話を合わせる

心当たりがあるが、もつそれは考へないことにした

キーコーカーコーン

音が割れているチャイムが鳴り響いた

「そろそろ、席に戻つたほうがいいぞ」「そうだな、戻ることに・・・」

ガラ！

教室の扉が開いた

先生か？と思つたが違つた

ヴィクトリア＝サーラ

昔、俺を助けてくれた王妃とその女騎士団がそこにいたついでに、サーラ王妃の外見は髪はピンク色のきれいな長髪で目は金色、あと背は女性の中で平均的だ

そして、サーラ王妃は俺の近くまで来てこういった

「神彩剣吾かみさやけんご・・・お願いです、私たちの国を助けてください」

・・・頭を深々と下げて言った

その瞬間、騒いでいたみんなが黙つて・・・すぐ騒ぎ出した

「おい！神彩！どういふことだよ！？」

友人が遠くのから話しかけてくる
頭を下げてゐる人は王妃・・・だから王の妻だ・・・
俺はこの人とちょっとしたこと、て言つた俺を魔界から助けてもらつた恩があるから大抵のことには手を貸すつもりだが・・・
また、戦うのだけはごめんだつた

「何のことだ？ていうかあんたたち誰だ？」

この平凡でささやかな幸せがある生活を終わらせたくない
だから、俺は知らないふりすることにした

この方法が一番いい

あっちだつて、俺と会つのは7年ぶりぐらいだ
どうせ忘れているに決まつてゐる

だけど、相手は・・・

「いいえ、剣吾……いや、またの名を漆黒の無双のことは忘れたことはありません」

・・・あちゃー完璧に覚えられているな
て言つた、その厨一病くさいのまだ覚えていたんだ
さて・・・どうこう風に対応しよう
そう考へてゐる時だつた

「王妃様・・失礼ですが本当にこの者が助けてくれるのですか? 私にはただの凡人にしか見えませんが・・・」

おお・・・言つてくれるねえ
だけど、ijiで反論するとめんどくさいことになるから黙つておくが

「黙りなさい、ミララ。」の人はあなたなんか一瞬で倒すくらいの魔力の持ち主ですよ」

ミララって言うのか・・・サーラ王妃の後ろで剣を腰につけ、金髪でツインテール、目は青色の女は

「でも、私には感じることができないのです。この者の魔力が・・・

」

当たり前だ、てめえ程度に感じることができたらせつかく抑えてい
るのに意味がねえじやねえか
ていうか、周りが本当に混乱してきたぞ・・・どうすればいいんだ
?これ・・・

別の方をとるうと考へてゐる時だつた

「王妃様! ばれました! 」

女騎士団の一人が後ろの方で叫んでいる

・・・女騎士団は見たところ、6人で教室の出入口をふさいでいる

その後ろの方から声がして・・・ぱれた?ビリコリ!ことだ

「お願いです!!助けてください、剣吾・・・」「だから、なんのこと・・・」

ドオオオオン!!!!

逆・・・教室の扉とは全く別の方へ・・・窓がある方で爆発音が聞こえた

嫌な予感がする

「騎士団!!配置につき、窓を開けろ!!何としてでも、王妃に誰一人近づけるな!!」

ミララは叫んで騎士団を動かす

良い判断だな・・・窓がある、と言つことはガラスがはられている。もし、そこから破片が飛び散りでもしたらけが人が出る

案外、強いのか?こいつら・・・俺みたいに魔力を抑えているたりして

「・・・隊長!!ドラゴンが・・・」

はあ・・・どうやつてきたんだよ!!

警官とか何してんだよ!!つて、魔力を持つていらないやつに言つても無駄か

多分、姿すら見れてないだろ?なあ。と言つた、クラスのやつら[冒]メとのやめる・・・ちゃんとそいつらはそいつらの仕事しているんだよ・・・お前らは見えてないけど!!

周りは変なものを見るよつたで見ていく
さて・・・この間に逃げ・・・

「ギャアアー——オオオ——！」

！——・・・まじかよ！——

俺は教室の出入り口と全く別の窓の方に走った
まさか・・・本当に「ロリコン」が・・・いた
しかも、3体いる

まだ、少し遠いがブレスをしたら当たる距離だ
ちょっとやばいか？

騎士団のやつら剣しか構えていない
このままだと、全滅だな

・・・はあ、今回だけやるか

「はあ、サーラ王妃、今だけは助けてやるよ」

「本當ですか！——」

「召喚魔法・・・黒魔の騎士」

俺は7年ぶりぐらいに、黒魔の騎士の装備を召喚した

この召喚魔法は自動的に俺に装着してくれて便利だ。あと、サイズ
は唱えたもののぴったりのサイズになってくれる。まあ、ならなか
つたら7年前と同じ・・・恐ろしいな高校生が小学生の服を着るよう
なものになるから、絶対に会わない

ついでに、騎士だから剣もついている。わざわざ剣、単体で召喚す
る必要がない

まあ、刃がついていないから何も切ることができない剣だけ
ついでに、この装備は魔力がないやつだって見える
おかげで、クラスのやつらは目が点になつていい
言い訳できないよな・・・

さて、さつせと終わらせて逃げよう
俺は窓から飛び出した

「おー！…なにやつて…」

ミリラは俺に呼びかけるだけど俺は

「大丈夫だつて、俺飛べるから」

そう、俺は飛べる。昔からなぜか俺は飛ぶことができた
その方法を教えて欲しいとよく言われるけど俺は感覚だけでやつて
いるからその方法を教えても誰も飛べなかつた
よし・・そう言えば、この技まだ使えるかな？

「スラッシュ！…」

俺は、技の名前を叫び、剣を振った
この技は、振った剣先から斬撃を飛ばす技だ。ついでに、一番威力
が弱い。あと、剣に刃がついていないと何も切れはしない
だから、威嚇程度・・・だけど十分だ
なぜなら、この技も俺しか使えない・・・未知の技を見たら逃げる
だろ

そう思つたが、スラッシュが予想より斬撃を強く飛ばしてしまい・・

「ギャアアオオ！…」

ドリゴン、一体撃墜してしまつた

「（やつちまつた！…）」

できるだけ、傷つけたくなかったのに！

ていうか、死んでないよな！？

俺は殺しとかそう言つのは昔からなぜか嫌い・・つて言つたのが嫌だ

だから、俺は刃のついていない剣しか持つてない。昔から

多分打撲程度だと思うんだが・・・

昔と今じゃ、全然違うみたいだな

さつきのスラッシュを見ると

「ギャアアオオ！————！」

やば・・怒りだしたか？

でも、ドラゴンが野生でここに来るはずがない・・・多分、ドラゴンに誰かが乗つていると思う

引いてくれるだろうと考へていると同時にドラゴンたちは急旋回し、去つて行つた

・・・どこから、来たんだ？

魔界の門は人間界でも1個あるかないかだ

その1個がこの王妃様の王国にあつたはずなんだけど・・・

「国を助けてくれつて言つたよな？王妃様」

「はい」

「何があつたか、一から話してくれ」

「わかりました。なら場所を変えましょ」

「助かる」

そつ言つて、俺達は教室から去つた

最後まで、読んでくれてありがとうございます（――）ま
まだまだ、未熟ですが続けていくので読んでいくください
あと、この小説を読んでわかりにくかったところがある場合は感想
のところに書いてください。できるかぎり、読者にわかりやすくす
るために頑張りますので

1 話（前書き）

今回は、シリ=シリ=シリ視点です

納得がいかない！！

なんで、魔力がないやつが空を飛んだり、ドラゴンを倒したりすることができるんだ！

女騎士団が成立して7年・・・最初からいる私からしてみればこの凡人は不思議すぎる。まるであの時の教官みたいだ

女騎士団は、普通の騎士団と比べて魔力が大幅に高い。女王様を守るのも女騎士団しかできない

そんな名誉ある騎士団なのに、魔力がないやつに王妃を守られるなんて・・・あの教官に顔向けできない

昔、私達の騎士団は子供の遊びで設立された
その男の遊び相手が教官だ。その人は尋常じゃないほど魔力を持つ
ていて、どんなに私たちがくじけそうになつても手を差し伸べてくれた。

その人からしてみれば、ただの遊びだったかも知れないけど私たち
からしてみれば遊びじゃなかつた

そして、私たちはその遊んだその日の内に王妃様に言いに行き、正式に騎士団となつた

私たちはうれしかつたけど、教官は騎士団成立を知らない
いつの間にかいなくなつていた。

全員で町の人聞き込みをしたけど、意味がなかつた
まるで鳥のように空に逃げたのかも・・・そんな考えもうかんなり
していた

あれから、私たちは教官に一度もあつていない

そう言えれば、一度だけ王妃様に訪ねた時に王妃様はこんなことを言つていたな

『あの人はあなたたちとはちょっと違つんです。だから忘れなさい』つて言つていた

あの時の私達にはどうこうとかわからなかつたけど今ならわかる

私はあの人に恋をしていたんだ。子供だからいろんな感情が入り混じつたりしてよくわからなかつた

ただ、それだけのことだ・・・もし、また教官に会えたなら伝えよう

『好きです』最初で多分最後の告白を・・・

【神彩剣吾の家 周辺】

・・・デカいな・・・

この凡人、まさかこんなにもデカい家に住んでいるのか？
ぱっと見ただけでも普通の家3軒ぐらいはあるだろ？

金持ち？なら、王妃様が訪ねてきた理由がわかる

経済的投資か・・・しかも、この凡人ドラゴンを撃墜するほどの力
があるみたいだ

その力で国を取り返し、そして経済もこのものの金でなんとかする
さすがは王妃様だ！！私達みたいなのは考えようもないことをし
てくれる

だけど、違つた

「おーい、みんなどうちを見ているんだ？こっちのアパートだぞ。
俺の家」

・・・へ？

右側をゆっくりと見ると、古臭いアパートが立つて
どうじうことだ？経済投資じゃないのか・

ますます訳の分からぬことになつてきた
もつ、考へるのはやめよう。すべて王妃様に任せたら今は何とかなるだらう

私はそう思ひながら、神彩とか言つもの家に入らうしたが……

「待つた、待つた。こんなにも入ることができるないんだこの家
「なら、どうするんですか？ 剣呑さま」

剣呑さま……わきまで呼び捨てだつたのに、王妃様がこの者に「
わき」を語尾使う！？

その瞬間、私の何かが行動をさせた

「王妃様……」のものに「さま」なんて使わなくてよろしいです……」

私は鞘から剣を抜き、この凡人の首元に当てた
もちろん、切れるように刃を表にして

「おつと、怖いな」

嘘だ……この凡人は全然怖がつていない
その証拠に、剣を突き付けられて笑つている
本当にハつ裂きにしてやろうか？

そんな考へが浮かんでいた
だけど……

「やめなさい」、//リリ。さつきのこと忘れたのですか？

そうだ、よくよく考へてみればこの凡人はドリゴンをいとも簡単に
撃墜していた

ここで、ハつ裂きにしようとすれば逆にやられる

私はそう思い、剣を納めた

「でだ、この人數で人目に付かない場所・・あるんだけどどうする
?」

何を言つているんだ?「こいつ

そんないい場所があるなら最初からそこに行けばいいのこ

「いいですよ、その場所で」

王妃様は答える

そして、この凡人は手を叩き

「扉の魔法・・・ストラム」

その瞬間、凡人に目の前に現れた

その中は、綺麗な緑色が広がる大地だ

「さて、ここに入るにつれて注意があるんだが

「なんでしょう」

こじはちゃんと聞いておかないとな

仮にも私は騎士隊長、団で隊長つておかしいと思つけど団長は決まつているから私はその下の隊長だ

だから、ここの団をちゃんと仕切るためにきいておかないと・・・

「こじにいるモンスターに絶対手を出さないでくれ

「どうしてだ?」

私は率直な疑問を聞いた

おとなしいからか？それとも、毒か何か持っているのか？
でも、どちらとも違った

「いや、単純にモンスターが強いから手を出さないでくれ。撃退するのめんどいから」

「そうですか、わかりました」

王妃様が答える

・・・強いか・・・

まあ、この凡人は魔力を持つていなければどんなモンスターも強く思えるんだろうな

その点、私達女騎士団は大丈夫だろうな

まあ、この凡人が頭を下げて助けてくれって叫んだら助けてやるかそう思いながら私は扉に入つて行つた

【神彩 剣吾の扉の世界】

なんだ・・・外から見たのと変わりないじゃないか
綺麗な草原が広がっている

香りがいいな・・・すがすがしい気分になる

ずっとここにいたいな。そんな気分になつてきた
周りを見ると全員目を細めている。この気分を味待つてているのだろう
だが、2人だけ違つた。凡人ともう、1人新人の女騎士だけが目を見開いて周りを注意深く探つている

こんなところに注意するものなんてないだろ。現に王妃様も目を細めている、いつも注意深いのに・
そう考えながら私は目をつぶつた

今回は、ヴィクトリア＝ミーナ視点です。

え！？え？

なんでみんな知らない土地にきて、そんなに警戒心なくいれるの？
ましてや、注意されたばつかなんだよ？

その人は私と同じで周りを警戒しているみたい
なんだろう・・・私、この人のこと知っているのかな？

最初に会った時から何か、懐かしいものを感じる
でも、気のせいよね、ずっと可愛がられていた私、サーラ母様の娘
ヴィクトリア＝ミーナ
外にも出たことないのに、知っているわけないじゃない

「なあ、お前名前なんていうんだ？」
「！？」

突然、話しかけられた
な、名前・・・そう言えば、まだ自己紹介していない。でも、自分がサーラ母様の娘っていうのは伏せておこう
まだ、この人を完全に信用したわけじゃないのだから
しかし、どうする？名前を変えるのも抵抗がある
どうしよう・・・

「あ、別に話したくないなら話さなくていいぞ？今、お前だけがま
ともだつたから話しかけているだけだしな
「え？」

私は目を見開いた
「私だけ！？騎士団のみんなは！？」

女王様を守る女騎士団、私も素性を隠しているけど女騎士団の一
だけど、みんなとは年季が違う
女騎士団設立からいる人もまともじゃない！！

現にミララ隊長も目を閉じていてる・・・嘘でしょ！？
私は鞘から剣を抜いて、この人に突き付ける

「どういふことなの？なんでみんな目を閉じているの？」

威嚇しながら聞く

この人は、確実に私達女騎士団より魔力がある
ドランゴンを撃退した。そして、扉を召喚した
何もかもがおかしい・・・いや、魔力が多くすぎるのかも知れない。
この人は・・・

一瞬でも警戒を解けない
もし、解いたならやられるかもしれない
だけど、この人は私を見ずに

「・・・やばいな・・・」

その一言だけ言つて飛んで行つた

嘘でしょ！？なんで私は見知らぬ土地で一人だけなの？
いや、正確には周りには、ヒルナやシーナがいる
隊長もいるけど、みんな目をつぶつて動かない。しかもたつたまま
どうしよう、ここで注意されていたモンスターが出てきたら
そり、考へてゐる時だった

「「フーー」

鳴き声が後ろから聞こえた
恐る恐る後ろに振り返ると・・・

イノシシが、立っていた

しかも、棍棒みたいなものを持つて

そして、その棍棒を振りかぶり私に・・・

当てるよう、振った

――ブン――

とつさに、私は剣でガードをしたが・・・

バキン

音を立てて壊れた

この剣は決してろくはない

ちゃんと毎日手入れをしていた

なのに、一撃・・・私の手もしごれて動かない

足もすくんで動かない

そして、イノシシは私の近くまで来て・・また、振りかぶった

私は目を閉じてしゃがんだ

そんなことで避けれるわけがない

だけど、とつさに体が動いた

なにもできない。こんなところで私は終わってしまうの?

ゆっくりと私にあた・・・

「はいはい、そこまで!――

え?だれ・・?

ドオオオン!――

近くで爆発音が鳴り響く
どういうこと?

イノシリの攻撃がいつまでたっても来ない
私はいつの間にか目を閉じていたその目を開けたら
イノシリが倒れていた。しかも遠くの方で
あんなにもぶつ飛ばしたのか?

私の近くにはあの人と女騎士団、あと家が建っていた
田をつぶる前にはこんなものはなかつた
・・・まさか

「！」まで運んであいつまで倒すの辛かつたぞ？」

本当にやつたんだ
こんな人間離れの技
すごい・・・なんて人なんだ

「さて、女騎士団とサーラ王妃を家に運ぶぞ？」一応、この家、核兵
器使われても壊れないからな」

「・・・名前、なんて言うんです？」

「は？」

突然だけど、気になつた

学校で一度サーラ母様が言つていたけど、私は後ろの方にいたから
よく聞き取れなかつた

だから、もう一度聞きたい。この人の名前

「そうだな。今は漆黒の無双って名乗つておくが」

「どういうこと？」

「お前の国ではこっちのほうが有名だからな」

「知らないわよ、そんな名前」

聞いたことがない、そんな通り名みたいなの
どうして、この人は隠そつとするんだろう・・・まあ、いいや

「私の名前はヴィクトリア＝ミーナ」

「へえ、王妃様の娘か」

「驚かないの？」

女騎士団のみんなは私の正体を明かすと驚いたのに・・・
なんでこの人は驚かないの？

私は、生まれたことすら隠していたのに

「大きくなつたな・・・」

頭の上に手を置かれて撫でられた
気持ちいい・・・ただ、そんな気分になつた

「なんで小さい頃のこと知つているの？」

「お前は覚えてないかも知れないけど、一度だけお前と遊んだこと
あるぞ？」

「え？」

「どういうこと？」

子供のころ一回も遊んだことはない。いつも勉強や魔法のことをし
ていた
なのに、遊んだことがある？

「もつとも、お前はまだ赤ん坊だつたけどな」

そういうことか・・・でも、私知つているんだ

何者なんだろう・・・この人

母様に頭を下げるさせて、國を助けてくれって言わせたり、ドラゴンやイノシシを倒す力を持つっていたり・・・何もかもすゞぎる
そう考えながら、私は目を閉じようとしたけど・・・

「おつと、寝るなら。家に入れ。全員入れといてやるから」

「はい・・・」

私は家に入り、靴を脱ぎ、そして、書かれていた自分の部屋に入つて寝た

でも、私はまだ気づいていなかった。いつの間にか、私の名前がこの人に知られていることに・・・

四話（前書き）

今回は、かみさやけんじ神彩剣吾視点です

「あ、やつぱりこうなったか
扉の世界は、召喚したものの望みを反映させる場合が多い
俺の場合、眠たいだ・・・だから、ここに入れば妙な睡魔に襲われる
しかもだ、召喚したものの魔力で強制させられるから、大体は寝る
さらには、モンスターも召喚したものの魔力に反映される・・・
まあ、勝手に家が建つからいいだけど、いちいち場所を探さないと
いけないのがきつい
そして、眠たい

「はああ～～～」

大きなあぐびがこぼれる
ここで寝るわけにはいかないんだよなあ
とりあえず、女騎士団を全員この中に入れてその後で、国でも救い
に行かないとな
王妃様に頭下げられたら助けないわけにはいかないからな
さて・・・やるか

数分後

「これで・・・最後つとーー！」

1人1人、ソファに寝かせた
鎧を着ているけど、まあぐつすり寝ていいから大丈夫だろう
あとは・・・

「扉の魔法・・・ムラトスーー！」

開くのが、ストラム。閉めるのが、ムラトス……まあ、逆に読めばいいから楽だ

まあ、その場合、他のやつらは扉から出ないといけないんだけど、この場合は閉じ込めるから便利だ

俺の視界では、世界が歪む。そして、扉の外の世界……現実が現れる

ついでに、閉じ込めて24時間たてば自動的に召喚したものの近くに飛ばされる

よし・・・閉じ込めたし、ちょっと本氣を出して、国を・・・ラーシヤ王国を助けるか

ラーシャ王国は、日本から俺の速度で、3分程度……

さて……やるか……

【ラーシャ王国】

ドカアアアン……

悲鳴が突然飛び交う……すべて、兵士の叫びだ
俺としたらこんなめんどくさいことしたくないけど、まあやつとこたほうがいいだろ

【王座】

俺はもう、到達していた

あの兵士たちは簡単に倒すことができた……正直、弱かつた

「アーラ王……奇襲です……」

「ついたえるな……」の機会を待っていたんだろう……あの女騎士団をつぶす……

「いえ！…敵は…」

そして、後の言葉を聞いたアーラ王は言葉を失った
まあ、たつた一人でここまでこれらたら誰でも失うだろ

「1人…・・・だと？」

「はい、しかも男との報告です」

「バカな！…そんなことが…・・・」

「ありえるんだよ」

俺は地上から壁になつていていた兵士たちを全員ぶつ飛ばして王様みた
いなやつに近づいた
さて・・・とりあえず、本当の王様助けるか

「何もだ・・・貴様！…！」

剣を引き抜き、俺に付きたてる・・・俺はその剣を一瞬にして折つた
そして・・・耳元でつぶやいた

「前の王はどうした？」

「と・・・とつぐに死んでる！…！」

死んでいる？まさか、女騎士団が去つた後に・・・

「私たちはここが女が仕切つていてと聞いたから攻めてきたんだ！」

「！」

なるほどな・・・死んでいたのか・・・説明『苦労さん

なら、予定変更だ。助ける対象の王様がいないなら、国を助ける

俺は王の耳元でこういった

「ここに来た、兵士を連れてされ……一応、言つておくけど一人でも残したら首が飛ぶと思えよ?」

「ヒ・・ツヒイイ!—!—!」

醜い逃げ方をして逃げ去つて行つた

ボエエエエ!—!—!

・・・多分、今のが合図だな
兵士の魔力が移動を始めた
これで、表面的にはOK・・・
次は、捕えられている。元この国の兵士を助けるか
俺は弱つている魔力を探しだし・・・見つけた

【牢】

ここで、捕えられているみたいだな

「あなたは?」「・・・まあ、正義の味方かな?」

俺は鍵を探すのが面倒だったから。近くにあったハサミを手に取り・
・・

「ちょっと、下がつてろ・・・スラッシュ!—!—!」

スラッシュで牢の柵を切り裂いた。

はあ、こういう時だけ切れる刃を持っておいた方がいいと思うな。
俺・・・

「あ、ありがたい。やっと家族に・・・」

「さつさ言つて言つふらしてくれ。国は救われたと・・・」

「は、はい！――」

みんな一目散に外へ出る

ここで、閉じ込められていたんだ。ストレスが溜まつたんだらうさて・・・ここからは、王妃様の出番だな・・・

俺はそう思いながら、外へ出た。いつの間にか外は夜だ通りで眠たいはずだ

俺はそう思いながら、王の家・・・城に戻った

そこから、無意識のまま王のベットで寝た

それが、俺の人生で一番、最悪で最高の出来事の始まりだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9940z/>

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました
2012年1月5日20時54分発行